

平成 21 年度地域情報化アドバイザー会議

第 3 分科会 議事録要旨

1. 日 時：平成 21 年 10 月 30 日（金） 15：15～16：10
2. 場 所：弘済会館（菊西）
3. 参加者：坂本リーダー、山中リーダー、石塚構成員、伊藤構成員、
金平構成員、佐藤構成員、塩崎構成員、福原構成員、前田構成員
柳田構成員、横石構成員

4. 議事内容

● 分科会テーマ

ICT を活用した観光・農業・地場産業の振興

● 議事

(リーダー)

第 3 分科会の高知大学の坂本と申します。宜しくお願ひ致します。今日は、時間が限られますので、早速始めたいと思ひますけど、皆さんお手元に昨日迄に（メールで）お送り頂きました資料を全て配布しております。一応、6 名の委員から資料が出ておりますので、それをご参考にしていただき、ご議論いただきたいと思ひます。

メーリングリストでも議論しましたが、取りまとめは、この分科会の司会は山中先生の方にお願ひして、昨日までに山中先生の方で、大体の提言内容を、粗方まとめて下さっておりますので、司会と全体会での発表を、両方非常に申し訳ないのですが、山中先生の方にお願ひしたいと思ひます。

これから一応、55 分間になりますけど、時間厳守ということですから、長引くことは出来ません。時間丁度に終わらなければならないのですが、山中先生の方に司会をお願ひし、議論し、提言内容・意見をまとめたいと思ひますので宜しくお願ひいたします。

(リーダー)

では、時間もございませんので、始めさせていただきます。山中と申します。熊本大学にありますが、宜しくお願ひいたします。以前、コンピュータ企業で、OS ソフトウェアの開発をやっております、そのこともありますが、今大学の方でずっとやっております。で、皆様方のところでも色々有名な人々ばかりでして、色々とお忙しいところもありますし、それからご意見も色々あるかと思ひますが、今回は時間が非常に限られていますので、1 時間もありませんので、どういう風にして進めるかという風なものをちょっと事前に考えさせて頂きました。昨日、私もウロウロして、行方不明のような仕事をしていて、学内でも評判の悪い時がありますので、皆様方に相当迷惑をかけたこと思ひますけど、事前に送っていただいた方々の資料をずっと、私、目を通させていただきまして、主な項目とか、問題点、それを整理させていただきました。で、どう

しても間に合わなかった方がいらっしゃると思います。で、そういう点も踏まえまして、ちょっと簡単にご説明させていただきます。

進め方、この分科会の進め方をまずご提案して、ご了承いただいて、そのあと、具体的に議論に入りたいと思います。先程、ちょっと申しましたけれども、まず最初、実際私の手元に資料が来たのは5名の方なのですが、そのあとちょっと時間がなくて、私が帰ろうかなとしたときに、ポーと入ってきたりしまして、どうしても対応できなかったところもありますので、私の手元に来たものをずーっと見まして、で、項目を整理させて頂きましたので、その方々のものを一番最初に、今お手元に配布しました原案（としましたけれども）、これを私の方で纏めさせて頂きました。で、これを簡単に説明させて頂きます。まず、最初に。

その後、いわゆる、あと補足すべき項目とか、そういう点ございましたらお願いいたします。それから今日初めて提出なさっている方もいらっしゃるかと思うのですが、その方々も一緒に、この原案のこういうところを変えとか、順序も変えて、これはもっと強調すべきとか、そういうご意見もいただくというのが第2段階です。それで、第3番目というのは、いわゆるこのあと5分程度で分科会の報告をしないといけない訳ですので、そのことにつきまして最後の段階で皆様方とご相談して、5分ではみな（全部）しゃべる訳にはいきませんので、どれを強調するとか、そういうことを御提言いただきたい。それをもって、この分科会を終了できればというふうに思っております。それで、簡単に申しますと、最初、皆様方から出していただいたその内容を私が簡単に項目をまとめております。その次が、皆様方のご意見、今日初めて出されている方も含めまして、ご意見いただくと。3番目には全体的な最後の5分間で、次の会議で報告しないといけない点を詰めていただくという手順で参りたいと思いますが如何でしょうか。宜しいでしょうか。

それでは、早速、送っていただいた方々の、これは私の手元には5名の方々なんです。前田委員さん、金平委員さん、柳田委員さん、伊藤委員さん、福原委員さん、この5名の方のところは項目が入っています。今日ご出席なさって初めて居られる方は、この後一緒にご提言いただければと思いますので宜しく願いいたします。呉々も時間の限界のあるところを頭に入れて、ご発言いただければというふうに思います。それじゃ、簡単にご紹介いたします。

成功した事例・要因、これがまた一つ大事かと思えます。これはICTの実際やった成果が地域住民の分かりやすいということでご指摘いただいております。これは、一つは、地方の場合は雇用を創るとというのが地域の人に一番大事でないかというふうなご指摘です。矢印の方、私が要約としてしました。地域での雇用の創出ということが、やはりこれが一番重要なことであろう。2番目は、コーディネーターの重要性ということで、い

いわゆるこれはコンサルタント会社でも、なかなか上手く行きませんでしたので、特に中央のコンサルタント会社が地方にきていままでやってましたけれども、成果が上がらないというのが大体多かったですので、この点から見るとここは住民の痛みが分かる人という意味じゃないかなという風に私は解釈させていただきました。それから、身の丈にあったやり方、これも能力にあった形で展開していくということだと思います。それから、情報の発信のあり方ですね。それから③にしましたけれども、今度は地方自治体の関わり方ということで、これも非常に大事なことがあると思います。個人ではなかなか実現できないものと、それから自治体にしてみれば遊休施設の再利用と、そういう風なものをうまくミックスできる、そういう展開ということになるかだと思います。④ですけども、実践的な人材育成とその重要性ですね、それから5番目は ICT で弱者どおしの連携、逆に言えば自分の強いところを如何に上手く結びつけるかということです。それは、そこに書きましたけれども、事例・報告いただきました。それから失敗した事例としては、システムありきで構築していて、地域の実態に即していないということになるかだと思います。それから、その次ぎですけども、ICT の導入、全国展開に当たっての課題ということで、制度的な問題、これを説明しますと長くなりますけれども、いわゆるシステム提供者と利用者の間では、利害関係が非常に対決しますので、そこで価格の問題とかいう、その調整機能というのがなかなか難しいという風に思いますし、皆様方、地域で成功なさっているところは、そこを上手く調整なさった成功事例かだと思います。それから、システムと地方の関係ですね。それから地域のインフラが整っていない。それから、閉鎖的な地域の風土みたいなものがございすけれども、それも考えないといけなないということになります。それから、技術的な問題では、その利用端末がパソコンから形態電話に移ってきているから、それに対応するようなコンテンツの開発というのが技術的に課題じゃないかというご指摘がございました。

それから、人的な問題ということで、その、皆様方のようなスキルを持っておられる方が少ないというのが結論です。土地柄とも、分かれるという方々ですね。そういう人材がない。それから、マネジメントのプロがなかなか確保しきれていないということです。それから、役所の ICT 教育、いわゆるそういう風なものが非常に弱いということになります。担当でも、これもある特定の部署しかこないという、本当は他の部署も大事なのですが、そういう問題があるということです。で、課題解決に向けての提言ということで、大きく私がまとめさせていただきました。これは、基本的に言いますと、地域の（1）ですが、地域の本当の、地域固有の問題、農村とかそういう固有の問題が分かって、なおかつ ICT の色々先端的な、私も企業におりましたけれども、これはものすごく進歩しますけれども、その両方を如何に取りもつかという、そういう人材を創っていくと、ここが地域情報化アドバイザーの役割というのは、そういうところに、非常に重要な役割があるのではないかというのが第1点です。第2点目は、地域住民や地域の個性を重視した地域情報化政策という、これは皆様方の地域の個性を非常に発揮なす

てご活躍なさっていますので、その文面です。特に企業とはまったく違って、地方には企業に勤めていない方々であるお年寄り、子ども、身体の不自由な方とか、そういう情報化ですので、企業のモデルはまずモデルのならないということになります。それから、

(3) ですが、ここを簡潔に申し上げますと、私は3つ皆様方のご提言の中から柱を整理しました。一つは、皆様方に一番ご指摘が多かったビジネス展開という点です。これは①です。地域産業の振興にICTを活用していくということですね。で、2番目が、これが私が考えて非常に大事と思っているのは地域住民の生活の安全・安心、いわゆる自然災害とか緊急通報とかそういう風なものも非常にICTの、非常に大事なところですが、これはビジネスとしてなかなか成り立ちにくいということで、公的な機関とのタイアップをしないといけない、この2番目の②の、それも避けて通れない重要な視点かと思えます。3番目というのは、今度は、いろいろな生き方、まあ皆様方いろいろご活躍なさって、素晴らしいライフスタイルをされてますので、そういうライフスタイルを他の地域の人たちも見れると、これはお金にならないけれども人生に非常に大切なことという、で、これは費用・便益の計算ではまず出てきませんので、これは経済学で言えば外部効果というのですが、そういう点をしないと、評価をしないといけない。これは国が本気でしないといけないことなんじゃないかなという気がいたします。お金になりませんので、ビジネスとしては成り立たない訳ですが、地域の人に生活では非常に大事な分野であろうと思えます。

大雑把にまとめさせていただきましたけれども、これが第一番目の皆様方からご提出いただいた項目をずっと並べ替えながら整理して最後の柱を3つ、作らせていただきました。

第2番目の段階に入りますが、今日、これを一つのたたき台として、私が作られていただきましたけれども、ここの報告書の中に含ませていただいた方々、あるいは今日初めてご提言なされる方々のご意見を頂きながら、詰めて参りたいと思っておりますので、宜しくお願いします。

(リーダー)

ご意見ある方は、どうぞお願いします。提言書を出されていない方は、どうぞ、これ以外でも、含めてもかまいませんので、別の内容でもかまいませんのでご意見をお願いします。

(構成員)

非常に小さいところなんですけど、1ページ目の5番の、ICTと弱者同士の連携というところで、規格外野菜のマッチングシステムと書いてあるんですけども、規格外野菜等とか、ちょっと幅を付けていただきたい。細かいことで恐縮ですが。

(リーダー)

ということは、果物もあるということにすれば良いのですかね？

(構成員)

農家的に言うと、規格外だけではなくて、本当は良い物を高く、適正価格で売りたいというのが第1にあって、規格外ばかりが売れてしまうのは、それもちょっと、あまりそこだけICTになってしまっても困るので、どっちかと言うと、正しく適正価格で売るためにICTが利用できる方が、農家的には望ましいと思います。

(構成員)

同じく、1ページ目の所で、私も、②のコーディネーターの重要性というところで、情報発信と書いてあるのですけれども、情報流通にして頂きたい。発信、発信だと、ただ送っているだけで、今の姿になってしまいますから、お願いします。

(構成員)

遅れてしまって申し訳ないですけど、私が送った財団のことと違う話になって恐縮なんですけれども、もうちょっとだけ入れて頂きたいのは、2ページ目の(3)の人的な問題点というところで、たとえば皆様の所も同じだと思いますが、我々が活動しているところは限界集落に近い田舎のところばかりで、高齢者地域で、高齢者地域の人たちになんとか使っていただけるようなことを考えないといけないとか、高齢者どおしが連携して、高齢者どおしが自ら担っていくという体制を作らないと、とても間に合わないような所が多いと思います。

ということは、人的な問題においては、もうちょっと高齢者を何とかするような、高齢者のICTとかいうところを、キーワードをもう少し入れて頂けたらと思います。

(リーダー)

いわゆる、シニアネットとか言われている、ああいう組織でしょうか。

(構成員)

はい。

(リーダー)

私も宜しいでしょうか？ 私の資料にあります、ICT活用の現状と課題、これは四国情報通信局(四国情報通信懇談会)の方で取り纏めて、次の(ICT)の利活用に向けて何が抜けているのかというところを纏めた内容で、詳しい内容は最後のページ、1枚もののペーパーに書いてありますけれども、一枚の紙に纏めました。

課題は、多分、ここで山中先生が揚げられていることと、ほぼ同じで、私は、まず新産業分野の仕事が欲しいということです。それと、人材育成、それと、やはり使いやすいデジタル技術ということで、先程の高齢者もありましたけれども、やはり生活者がICTを意識せずに使えるような技術をもっと確立してもらわないと、これでは使えませんよね。上勝町は、非常に上手くやられていますけど、私は、これで課題を3つ揚げて、結局成功のもとには何があるのかということで、ここには「お金」だけはないですけど、やはり「人材」と「技術」と「企画・マネジメント力」と「スピード」、どれが欠けても多分失敗する。「お金」がないという理由（意味）は、「お金」は、人材と多分これだけのものがあれば多分自分で取ってくるだろうと、金がなくても取ってこれる。ここで、どれが欠けても、「スピード」が欠けても終わるし、「企画・マネジメント力」がなくても、多分、失敗するだろうし、多分、今までの失敗事例というのは、ここに、どれかに当たっていると思うのです。これが、上手く全てが機能していくと成功する。それから成功事例は、多分、これが上手く動いている。その中で、今後の課題として、利活用を進める上では、上にありますように、私自身が一番、新産業分野、イノベーションを起こさないと、今のままでやってもなかなか利活用が進まないということです。

(構成員)

高知大学の石塚でございます。新産業分野ということで、今、僕が色々と活動の中で考えていることは、特に医療の面が特に、僕が中心にやっているんですけども、電子カルテの導入がもう義務化される中で、そういう色んな医療情報、それから介護情報、栄養情報、それから住宅関係の今の情報、それらデータベースが色々と出来てくるということです。そうなってくると、それらのデータベースを如何に、分野を横断しながらそのデータを解析して、データサイエンスという分野になろうかと思うんですけど、そこから新しい、その新産業のネタというものが出てくると思うので、基礎領域分野でその部分の研究をささえていただくような、いわゆる施策というものが必要だなあという風に思っています。

それから、現場のレベルでの実際に産業というところを考えると、今インフラはだいぶ整備されているんですけど、特にケーブルテレビとか自治体などではやっていますが、コンテンツが全然自治体レベルで何も考えていないという現状があって、ここをどうするかというのが非常に大事かなという風に思っております。

あと、各自治体で色んな特産品とか、各商品毎の、例えば農家さん、単独の農家さんが売るとかということで、色んなサポート体制が結構あると思うんですが、町ぐるみで、町全体を売り出していく為の集出荷の仕組みであるとか、あと顧客リストの、今、取り敢えずいまやろうとしているのは、1万人の「町のファン」を作って、その方々が1万円の商品を年間購入して貰えるというようなところを目標に、地域の人と一緒に活動しながらやっている訳でございます。ようやく、集出荷の仕組みまで一応、ようやく出来

るようになったんですけど、まだ、そこを情報通信を使って、そこから発信して売っていくところまでの流が、これから多分、色んな地域で、自治体レベルで求められてくるのではないかという風に思っております。

(リーダー)

J Aはどのような感じですか。

(構成員)

そこで、足を引っ張ってくるのがJ Aになってくるんですけど、取り敢えず、今のところは小規模で生産して、沢山の量を抱えてくる訳ですから、この部分ぐらいは目をつむってよということで、最終的には町がPRされて全国的にその知名度が高くなれば、その農協の農産品だって売れるでしょうという、シナリオで一応話しは持っています。結構、抵抗は、最初はあります。

(リーダー)

いわゆる組織の問題と、の関連が出て参りますね。

(構成員)

そうです。

(構成員)

制度的な問題点の一番最後に、役所のICT教育ができていなところが多い、関心をもつのは、ごく一部の担当者のみであるという部分、もっと説明が足りない。担当者のみであることから「地域の情報化を阻害している」ということを、もっと記述する。

(リーダー)

本当にそうです。

担当者に説明しても分かってくれません。

役所のICT教育が出来ていないということは、要は、情報化を阻害している。

(リーダー)

関心あるのはごく一部の担当者のみであり、地域情報化を阻害している。

(構成員)

私も、半分ぐらい役所の人間なのですが、非常に厳しいご意見をいただいたなと思いま

す。その第2ページの地域情報化アドバイザーの重要な役割というところに、経験豊かな人が足りないと書いてありますけれども、今まで何カ所か行かせていただきましたが、その地域でやりたいことがあって、それと、ICTを、コンテンツを立ち上げるとかシステムを立ち上げるとか、その中にも書いてありますが、非常にずれがありまして、アドバイザーというのはいつもいないので、その地域の中での繋ぎ役というか、その存在が非常に重要だと思います。何回か行かせていただいた中で、非常に感じていますので、アドバイザーのことだけではないのですが、現場に行ってみるということです。中間支援機能というか、そんなイメージが必要では。

(リーダー)

いわゆる、地域の中で中核となって、やっていただくような人も育てていくということですね。

(構成員)

中間支援機能、そんなイメージになるのかも知れません。

(構成員)

今の福原さんのご発言にプラスして言うとなると、アドバイザーとして行って指導するには、今のギャランティーがあまりにも安すぎて、責任をもってきちんとアドバイスするというようなものではなくて、本当にボランティア価格だと思うんですね。移動の時間とかを考えると、マクドナルドの時給よりも低くて、というくらい、やはりアドバイザーとして責任をもつ、それから3回だけでやはり、最後まで面倒を見るというのは出来なくて、私は地域の人たちが自分たちですぐに出来るというのは、そんなに簡単に出来るようなものだと思っていないので、継続的に、やはりずっとアドバイスをした人を面倒みていきたいと思うのです。で、それから、コンテンツの問題も(元編集者なので)、やはり素人がいきなり原稿を書くと言っても、そんな1回や2回の指導ではできません。なので、以前、いいまちづくり交付金事業の時に、全国の市町村が集まる電子会議室というものを1年間作ったことがあるんですけど、なんかそういった、このポータルとは別に、やはり市町村の勉強する場所とか機会とか、それからそれぞれのICTの進捗情報みたいなものをやはり、ある程度、フラットな中で、自分の所はどれくらい進んでいるとか、問題があるかってことがわかるような仕組みみたいなものがあると、みんなもやる気になるんじゃないかなと思います。

いろどりさんの、お年寄りの方たちが頑張ったみたいな、やはり自治体の中での競争力を作るみたいなことも、あって良いんじゃないかという風に思います。

(リーダー)

これは、ある面では国の責任ですね。多分、皆様方もそうと思いますが、大体、個人的な繋がりや依頼されてきますでしょう。もっと言えば、県も知らないと思います。この組織時代、県が知っているのかどうかも疑問ですよ。ちょっと言い過ぎたかもしれないですけども。実際、多分、皆様、色々な地域でご活躍なさっていますが、皆様、個人ブランドで、実は個人ブランドで動いているようなものですよ。

(構成員)

だから、・・・でも、他の事で呼ばれるのですよね。(ICT以外の事でも呼ばれる?)

(リーダー)

私も、昔から情報化をやっているのですが、情報化＝日本、教育も悪いのですが、情報化＝コンピュータシステムに置き換えてしまうんですね。そこに私は大きな欠陥をもっていると思うのですよ。情報と、われわれ情報と言っている中から我々はコンピュータシステムに置き換えて皆やってしまうと。今、皆様方が仰っているのは、情報の、コンピュータ以外の人の関係とか、地域のこととか、特性とか風土的なこととか、人間関係とか、そういうところなんですよ。それで、情報政策＝コンピュータ政策になってきてしまっているところに、致命傷が、日本に出てきていると思っているんです。日本の場合、特に、人の信頼関係を大事にしますので、公的にいるんでなくて、個人的に、やはり信頼関係ある人を訪ねて回りますので。その、なかなか表現が難しいですね。

(リーダー)

ちょっと話が元に戻ってしまうのですが、お話し中で申し訳ないですが、今回の与えられたテーマで、ICTを活用した観光・農業・地場産業の振興というところも含めて、何か、具体的なご意見がありましたらお願いします。横石さん、如何でしょうか?

(構成員)

うちの場合は、高齢者が使っているということで、非常に有名になったのですが、次のステップとしては、私がいまやっているステージを変え、若い子を取り入れたいと思っていて、社会貢献というか、世の中の役に立ちたいと、大企業ではなくて、自分が認められることをしたいという、難民支援をしたいとか、環境に対してとか、世界の環境に関わりたいたいとか、そういう考えをもった子が急にいま増えてきています。ですから、ある意味では、社会貢献的な形の中の自分の舞台というものを求めてきているので、ここを地域としてどうつくるかということが、うちにとっては最大のチャンス到来と見ていますので、この仕組みをどう作るかということが、実は、ICTと絡んでくるんで、や

っぱりもうこしなないですよ。こんだけ若い子が、もうとにかく上勝町なんかには怒濤のごとく押しよせて来ますので、もう何か事業でコツコツとではなく、10名、20名の定員でも何百人も応募が来ますからね。

(リーダー)

移ってこられる人はおられますか？

(構成員)

移ってきた人もいます。

(リーダー)

大体、年間、何人ぐらい。

(構成員)

まあ、そう・・・

ですから、その人たちがビジネスとしてやっていけるような仕組みを作らなければいけないと思います。ですから、やっぱり、こうビジネスということが当然基本になっていくので、それを役所にやれというのは無理ですから、今の、ちょっとこれはキツイというか、キツイというのではなく、考え方ですけれども、役所の人にそれは、頑張れというのは無理です。役所は、出来ないですね。無理ですし、そういうことを自分がやろうと、地域に住まない人がどんどん増えてきていますので、役所の人で地域に住まない人が徳島県内をみてもものすごい数になってきていますから、その人たちにヤレという方が、私に言わせると無理ですね。ですから、来たい人、やりたい人が、その舞台に立てるように、東京あたりからももの凄いその人が多いですから、その仕組みをどう作るかということが、一番、大学と連携しながら、やはりどこをどうやるかというのが、地方再生というか、それしか私はないと思います。上手く仕組みをまだうちも作れてないんで、それをどういう風にしたら良いのかというのが一番の課題です。それに、ICTというのは絶対に欠かせないので、ICTがなければ、そのことは出来ないのですから、その仕組みがちょっとまだ私の中に綺麗に見えていないんで、今は手探り状態という状態です。あまりにも手応えが凄すぎて、社会起業家になりたいと言って講演会したら、大学でも千人ぐらい来ますね。

(リーダー)

男女差はどれくらいですか？

(構成員)

女の人が7割から8割です。女性が多い。すぐに、地域の人と馴染みますよ。地域の人と一緒にやると、地域の人にはもの凄く受け入れをしますね。私も、まだ全ては形が見えていないということです。

(リーダー)

多分、前田委員さんも色々と案をもっていらっしゃると思うのですが、私も、それで、横石委員さんと、私、最初10年程前に、五島列島でお会いしています。10年か、もっと前かも知れませんが。今、おっしゃったのは非常に、私はですね、今、横石委員さんのご指摘なされたのが一番前の、そこに入れるべきと思っているんですよ。ICTの成果が地域住民に分かりやすいこと、というのが、いわゆる雇用の質というのと、今度はもう一つ大事なものは若者ですね。若者の、これは大体ずっと分析すると、大体過疎化していくのは進学の時なんですね。高校を出て、ガサッと減ります。中学校で減って、高校でガサッと減って、あと帰ってくる受け皿がないのです。それでいま、横石委員さんがおっしゃった、私はそれもずっとやっているんですが、これは地域共生型とか、地域自立型のテレワークセンターと私は思うんですね。で、前田委員さんは都会にいらして、ちょっと違うんですよ。それで、横石委員さんのおっしゃっているご指摘は、私は日本のICTの将来の姿を解決するものと思うんですよ。これは、東京以外は全部そうなんです。大阪もそうなんです、本社がありませんので。それで、そういう若者を如何に定着する受け皿を作りきれるか、ですね。これは面白い、ほんと言えば日本の政策はここ1本に絞った方が良く私は思います。

(構成員)

そのとおり、私はもう、それを言っているんです。政策はそこに置かないといけないと。

(リーダー)

そこに置かないといけないと。いわゆる日本は定住、いわゆる農耕民族で定住ですので、その先祖の関係とか、地域の関係とか非常に強いんで、欧米と違って。そういう意味からすると、お孫さんでも良いかな、地域に関連する人を、頭腦的な、あれを呼び戻すと、それを第一次産業と最先端のICTが共同、いやイノベーションですね。新しい形の。

(構成員)

待遇が良いわけではないですけど、東大、早稲田、慶應ざーと来ますね。東大生なんかも凄く多いですね。

(リーダー)

あの子たちはエリートすぎるから、かえって違った知を求めているのかも知れない。

(構成員)

JICAもそうでしょうか？ 半分ぐらいの希望者は東大ですね。

(リーダー)

思うのですが、どれくらい、10年とか20年先を考えて、定着するかというような不安が私はあるのですね。

(構成員)

その仕組みをどう考えるか、仕組みをどう作るかです。知恵を出して。それと、仕組みを考えることに国がお金を投資すべきです。だから農業の所得保障はいらないのです。あれをやることは絶対にダメです。直接、支えることをやっては絶対にダメです。

(リーダー)

経済学で言えば、外部効果というやつですね。直接お金じゃなくて、波及する効果を国がしなさいと。お金もうけは投資しても。

(リーダー)

定着させることも、来てもやはり5年や2~3年でまた、やはり出ていく。定着させる為には、そこで仕事ができる環境を作ると同時に、新ビジネスを創造していく。それから逆に言うと、農業分野かもしれないけど、新産業ですね。コンテンツ産業とか、色々なものを含めて、新産業を中山間に作りあげていく。それで定着させるようにする。

(リーダー)

それは、ICTが最高に特色を持っている。それしかないですよ。それしか、ない。後は、高速を幾らやってもガソリン代がいらしますので、中国の方がよっぽど有利ですので、ICT、いわゆる頭脳産業ですね。基本的には。

(構成員)

ただ、学生ということと言うと交流学生、うちは今、渋谷で毎週、朝市をやっているのですが、毎週、日曜日にやっているのですけれど、大学生たちが限界集落に行って、千葉の限界集落とかで野菜を実際に作って、採って、それを渋谷の城東という高級住宅地で売ったりしているので、実はうちの弟子も一人、徳島でコンテストに受かって、行った弟子も一人います。それで、大学時代だから割と、例えば、過酷な、バスで田舎に

行くとか、それから泊まる時に廃校に泊まるとか、そういったことも出来るっていうのもあるんで、大学時代に色んなところをグルグル回れるプログラムをいっぱい作って、その中で、坂本先生が仰るように、1回就職をして、3年か5年か会社を勤めた後に、やはり地域に貢献する事業をやっていくとすることができるのが、望ましんじゃないかなあという風に思っていて、で、今うちにくる大学生は就職活動をしている子供達が凄くいっぱい居るんですけども、大学の先生を前にして言うのも何なんですけど、大学の先生というのは真面目な企業とか、真面目な仕事しか知らなくて、あこぎな仕事とかあまりご存じなくて、私なんかは、大学の先生に、「そんな明日をも知れない仕事なんてよくしてますね。」と言われたんですけど、実際、その、仕事の幅というのは、もっともっと沢山あるんですけど、大学の先生自体もあまりご存じないので、是非、大学生が大学時代に色々なことを経験するプログラムを地域の自治体さん含めて、考えていただきたいと思います。

農業系の大学生は、実はみんな海外に農業研修というのに行っちゃうんですね。ベトナムとか、中国とか。で、どうして国内に行かないのかという、そういうことを、もうちょっと国内の自治体も考えて、やってほしいなというふうに思います。

(リーダー)

佐藤先生なんか、インターンシップで、和歌山大学でもやられていますでしょうか？

(構成員)

和歌山も、インターンシップをやっていますし、多分、横石さんにも教えていただきましたし、ほとんど観光と農業とぜんぶ、自治体の方は一応やっているんですけど、なかなか解決しない。問題は、継続性が問題で、それがちゃんと確立できるモデルがあれば、僕もそれを一生懸命さがしてはいるんですけど、なかなか今の日本ではそういうモデルというのは少ないですね。それは別として、若い人がきちっと行動できる取り組みを示す以外にはないですね。

(構成員)

そのビジネスモデルというか、そのビジネスを確立することに集中していなければいけない。それが出来てくると、いま言った若い人との地軸がうまく絡んでくると思うんで、どういう形で、先程いった行政的には無理なんで、やっぱりそういう民間のビジネス力の高い、なんというかビジネスの、1企業をどう作りあげていくかでしょうね。そこをどう作りあげていくかということが問題。

(リーダー)

マネージメントスクールみたいにかというか、マネージメント力とスピード力をアップし

ていって3年間のうちに、要は収益をあげるモデルにしていく、早く、そういうところを支援していくことをしていかないと、いつまでも、芽は出てつぶれて、になりますよね。まずは、そののあたりですね。

(構成員)

事業相談していて、それで今4年生で、今ICUの人なんだけれども、地域内で起業する、どうして食べて行くのと言ったら、アイデアがあるとのことで、夏休みに遊ばないで、幼児関連の企画を練っていた。ICUに幼稚園があるのと言ったら、「あるよ」というので、園長さんのところに行けば。と言ったら、行ってきた。そうすると4月から幼稚園の園長さんからあなたにお任せするとなり、それでもう生きていけるということで、そのような例もある。これは3年生なんですけど、起業してはいるが何処へ行っても、誰も何も教えてくれない。で、「お金はあるの」と聴くと、お金は何もない、それで「何ができるの」と言ったら、文房具関係にすごく関心がある。そうしたら就職課に行って、先輩で文房具屋さんに行っている人、先輩をとっつかまえて、学生を相手の調査で、百万とか2百万の、そういう企画書をちゃんと書いて行くんだと送り出したことがあるんですよ。結果は、帰ってきていないですけど。そういうアドバイス、そういうことがサポートできることが必要。

(リーダー)

ちょっとサポートしてやると活きる場所があるんですよ。

(構成員)

もう一つ気が付いたのは、慶應で、その大学の授業でやってもらっているのですけれども、僕が全然気が付かなかったことが一つあって、「上勝町に移り住みたい要因」ということで授業をやって貰ったときに、仲間意識というのがものすごい得点が高かったですね。だから、あの子達にというか、ああいう若い子は、仲間がいるか、いないか、ということをもの凄く評価していますね。評価するのが多いですね。だから、一人で飛び込んでいくことはまず続かないですね。1から3人位は、続かないですね。でも、うちのようには100人とか位になってくると、もう仲間が凄く多くて、もう常に仲間意識が連携されていくので、非常に強い形、海士(町)もそうやけど、強くなってくるんで、やっぱり、仲間を繋いでいく、こういうのも、一つの組織の仕組みの中に入れていく必要性はあるでしょうね。

(リーダー)

規模を大きくしないといけないですね。

(構成員)

だから、線で繋いでいくことも非常に大事。だから一番この中の課題は、先程、みなさんが言っているようなこと、ビジネスとしての、作りあげていく、何というかなあ、そこやな、そこが誰がどういう風にやっていくかということですね。

(リーダー)

そうですね。先程から、横石委員さんが仰られている内容から想像すると、やはり、今の若者も日本人ということですよ。友達とか、地域とか、色々、昔の農村のDNAをもっているんじゃないかなあと、田圃はないけれども、仲間を欲しがるというのが・・・

(構成員)

そういう世代とちゃうんかな、今の子どもなんか。

(リーダー)

そういうことなんでしょうね。

(構成員)

もの凄く、僕らの時代と違って仲間意識が強いですね。仲間どおしの意識が。

(リーダー)

というのは、日頃、欠落しているということなんでしょうかね。

(構成員)

そういう面が、今の日本の社会の、なんか習慣のようになってきている、仲間通しがメールとか、異常な関係というか、凄く関係になっています。

(リーダー)

そうです。いま相当なものが、大学生でもそうですが、もう精神的にやられている者が多いですよ。真面目であるけれども、人の関係ができないというところがありますのでね、具体的な物の見え方がないということです。

(リーダー)

塩崎さん、如何ですか？

(塩崎)

私は、群馬県桐生市という田舎の町に住んでいるんで、そこを何とかしようと、ずーと

関わっていると、まあ活動してきた中で、考えているんですけど、例えば、桐生市の場合ですね、2026年・7年になると高齢化が一番高く、他のとことでも同じようなことがおきていると思うんですけど、2050年には1億数千万が、何千万かに減少すると言うんで、その時にどういう形で生きているかというのを、我々の地域では一番最初に考えおって、そこにICTが如何に使えるかというのを常に考えています。だから、私はいま活動しているのは、実は、その、狭義でいいますと、地域の、ICTを使った地域の情報化をとこのからは、外れつつあるんですけども、テーマは、やはりその、目的があってそれに使える道具を、まあ、比較をしてきては使ってみて、試しながらということをやっているんで、その点が、アドバイザーというのは逆に考えてみると、地方がそういうところに、じゃあ何が一番適した道具なのか、あるいは、やり方なのかを、指導するのが良いのでしょうか、私も1回や2回、行っていますけれども、どういうことも出来ない。おこがましいですけどね。地域情報化のアドバイザーというのは。その辺、ちょっと非常にギャップがあって、どちらかというところちょっと逃げ腰になって、なにかあったとしてよっぽど私の面白いところがないと、ちょっと遠慮させてくださいと、切ってしまうぐらいなんですけれども。地域から見ると、きっと、それくらい何か欲しいなと思うんですよ。次に、アドバイザーは、もう少しですね、地域の人たちとしっかり話しをして、ここに何が必要なかを分からないと地域のアドバイスはいけないんじゃないかと思います。若者は沢山いらしゃるということを知りました。群馬県桐生市は、群馬大学工学部とあって、2500人もいますけど、なかなか若者は町にすぐ流れて来ませんよ。それは、是非、横石さんに来ていただいて、少し、教えていただきたいくらいです。非常に元気なお年寄りとかも居るんですけども、この経済の右肩下がりに、もう瀕死の状態になるのが見えていて、いきなりなるかもしれない、どうにもならないというのが現状だと思うんです。それは、ま、群馬県の桐生市だけではないですね。

(リーダー)

そうですね。今、ご指摘があったように、やはり若者が如何に魅力のあるものを、受け皿を作りきれんかって、やはり私は、究極はそこだと思います。それと、農業。農業だけではなくて、それを活かした形のいわゆる、私は頭脳産業、ICTは頭脳産業ですので、その大役というのは、本当にイノベーションと思っているので、そういうものですね。

(構成員)

我々の本当に地域のことを考えると、地域間の競争だと思っていて、群馬県桐生市の中。群馬県の中では、何処と何処に生き残るとか、どういう形で生き残るかを考えて、その町のビジョンを持ってないと、若者を受け入れても何にも出来ないんじゃないです

か。じゃあ、若者を受け入れるための、来てくれる要素は何が可能なのか、文化なのか産業なのか、自然なのか、それはあるいは環境なのか、それを考えていかなければならない。

(リーダー)

それは非常に多様な要素あると思います。

(構成員)

そうですね。どうやって評価するかですね。

(リーダー)

いま、良いことを仰っていただいたのが、今後の、まあ、つい、こうなると皆さん、一番最初にみなさんはビジネスと思うんですよね、若者は。その次ぎ、ちょっと2番目にきたのが、健康とかですよ、健康管理とか緊急通報とか、生活の安全・安心をどうするか、で、これはですね、費用・便益で考えたって絶対採算が合わないですよ。防災とか、自然災害とか。これはやっぱり国とか、そういうところを頼ってしまわないといけない、地元負担もありますので、究極になるといまの話のような、その小型になるんですよね。地元の人たちは安全といいます、経済負担が凄いから、それは国との関係とかすごく入ってきます。ここ一つは、国の非常に重要な役割が私はあると思うんですよ。それで、ビジネス的に展開するのは、そうではなくて、これは企業と競争が凄いです、これは企業間競争が入ります、次はやっぱり地域の安全性とか、自然災害、病気、緊急な病気の対応をどうするかとか、これはやっぱり地域の方々の負担では到底できませんし、これはやっぱり国がタイアップしないといけないと思います。

それから、一番後ろに書いたのは、どういうライフスタイルが良いのかとか、先程は、横石委員さんのあれがずっと流れたので、多分、群馬大学の学生は横石さんところへ行きたいと言いはじめると思うんですよ。自分のライフスタイルは、と。それで、そういうふうな、私これを3番目に書いたんですが、私は、これを精神的に豊かさと思うんですよ。で、これをICTでどう作るのかという話し、これはもう全然お金で返ってこないんですが、で、そういうふうな、こう、地域の振興の場合はお金で非常に完結する部分と、これはもう企業との競争を覚悟しないとイケませんが、その次ぎが自然災害とか急病が出たときにどうするかとか、これはもう国との関連でしないとイケませんが、今度、その、地域の豊かさをどう発信するかというのも、これはお金で換算できませんので、上勝町の取り組みに、私は興味があります。好きですという人なら行けるわけですよ。お金を出して。それで、お金で換算できる部分と、国と一緒にやらないといけない部分と、まったくお金で換算できないけれども人生で非常に大事な部分と、基本的に最低限、3つに分けないと、地域情報化がすすまないのではないのかというのが私の見

方なんです。

(リーダー)

それと、もう一つ、柳田さんと2時間ぐらい、来るまで議論をしてきまして、私はもう一度、デジタルからアナログへ戻してもらいたいなど、別に、回線ではなくて、人の心と取り組みを、アナログ的に。機械的に作業したって、やはり始まらない。心の伝わるような取り組みをしないと。それから、地域情報化アドバイザーの取り組みも、地域情報化も含め、やはりそういう、心はアナログ、やることはデジタルにしてもらいたいと思います。

次に、柳田さん、如何ですか？

(構成員)

実は、あの、今日、スカイツリーを見ながらですね、下町の家周りのグルメツアーをしてきたんですけど、二人というか、三人で。で、あの、地域情報化ですね、2つの側面があると思います。例えば、横石さんが仰っているような、例えば、都市型ではなく、今まで疲弊していたところが非常に、ある意味労働集約型でもって産業創造しておいて、あそこにICTを利活用したことで物流が起きた、ということですよ。それから、都市型っていえば、それこそ三鷹の周辺で、今、三多摩で横石さんにお話しただいて、実はそこにコミュニティ、電子コミュニティーができて、あれ、去年ですかね、お話しいただいたのは、1年間たってですね、横石さんが驚くほど多種・多様な人たちが出てきて、実はそこに、新たな産業創造ができつつあります。ていうような現象なんですね。方や、極端に言ってバイオだとかいうのを千葉で言えば君津の奥の方のご存じの所でバイオ産業、薬事産業、研究産業を創造しようとする、それって、ヘッドワークであるしICTの完璧な利活用なんです、雇用創造につながらないですよ。人がいないんです。そのところ、人数背反みいたいところで、上手くバランスとらないと、ICTありきだっってやっちゃうと、もの凄い見誤るんですね。今日も、皆さんご存じかもしれませんが、久米（信行）さんと言って、久米繊維の人と、古いんで、彼は今、明治大学のブログとか、一連の物をのっけているんですが、15年・20年、要はNifty創設の頃からのパソコン通信から変わっていない、それって何。っていうと、ICTが産業だと言っても、SEは労働集約型なんですけれども、他の、あと産業革命と繋がっていない、変わらないね。尚かつ、バーチャル、バーチャルしすぎてきているが故に、何か、こう、人が離れていて、疲れた、使うとこう何だか疎外感です。ちょっと1分だけ言うと、eネットキャラバンだとか、東京都のですね、eネットリーダーとか、小中高だとかに話して、驚くことが一昨日起きたんですね。何が起きたかっていうと、伊藤さんでも驚くと思いますが、中学・高校の親御さんが、仕事をして帰ると6時から7時ぐらいはメールの嵐だっっていうんですよ。で、右手にフライパン、左手に携帯があるん

だって。で、その発端っていうのが食事をしながら携帯メールをしている姿があるDVDを国語の教材で写していて、「これはないよね、家庭ですから」、「いや家はこうだ」。これって、ICTの利活用かなと、料理を作りながら心の方はうわの空じゃないですか。

(リーダー)

携帯の方が中心です。

(構成員)

中心でしょう。それで、食事をするときは、メールを打ちながら食べていたら、食文化以前の話ではないですか。エサですよ、それでは「やばい」と。これが、今の利活用かなと思愕然としました。というようなことです。

(構成員)

ICTを使って、バーチャルWORDが出来つつあるのは良くわかるのですが、そもそもそれは逆ではないかなと思います。リアルがあるんで、そこにICTを引き寄せるのがこのアドバイザーであるから、そのところを間違えちゃうと、あそこでじゃあ、ビジネスがあるから、じゃあどんどん行きなさいよと、そこはちょっと違うと思いますね。

(リーダー)

そこは、大切なところだと思います。

(リーダー)

時間がそろそろ参りまして、一応、今、最後、纏めないといえないんですけど、纏めるのは山中先生の頭の中で纏めていただいて、報告していただくということで、お願いしたいと思うのですが、宜しいでしょうか。

(全構成員)

承認。

(リーダー)

承認を得られたということで、どうも、本当にありがとうございました。

(リーダー)

途中で、「違う違う」という発言をしないように。

「そうだそうだ」ということで、お願いします。

今、皆さんが言っていただいたことは、本当に大事な、日本の情報政策の根幹だと思うんですよね。そうすると、地域の人たちもですよ、何のお金を使うかと言った時に、国のあれに対しても支援を贈りますしね、そういうきつとなると思います。どうも、ありがとうございました。

(構成員)

やっぱり、役所の人とかが、あの今、私も書いたんですけど、地域で、あの、青森県の人が、色んな施策ですとか、情報を逐一書いているですね。その人が、それを良しとしなければ、あえて、仕事もしないで何をやっているんだ、という話しになるんじゃないですか。多くの市町村だとかだと、情報化の人っていうのは割に変人に見られたりすることがあって、やっぱり、そこでは市町村のICTの取り組みというのを、国も挙げてやっぱり、一言、みんなでまともに考えましょうというルールを作らないと、ダメな気がする。ビジネスは民間でやって良いんですけど、この何というか基盤みたいなのは自治体ベースでしなといけないですよ。

(リーダー)

先程、柳田委員さんのご指摘なされた本当の中身は何かということに気が付けば、使い方も見えてくるんですが、そこが入っていないですよ。

(構成員)

そこを置き去りにしてやるから。

(リーダー)

どうも、ありがとうございました。

以 上

原案です：ご提出頂きました資料を基にして整理したものです。山中（熊本大学）
平成 21 年度地域情報化アドバイザー会議分科会成果報告書

1. 分科会テーマ：ICT を活用した観光・農業・地場産業の振興（第三分科会）
2. ICT利活用の現状
(1) 成功した事例・要因
① ICT の成果が地域住民に分かりやすいこと。 ・事業やビジネスには寿命があり、その寿命の前に新しい事業やビジネスを創出すること。これにより地域での雇用の創出につながった。⇒ 地域での雇用の創出
②コーディネーターの重要性。 ・「民」の視点を重視したコーディネーターの発掘 ⇒ 地域住民の痛みが分かる人 ・「身の丈」起業入居者の募集 ⇒ 能力にあったビジネス展開を支援
・情報誌、Web、internet TV、企業、NPO などと連携した情報発信とリアルタイムな情報発信の重要性。
③地方自治体の関わり方 ・「公設」の ICT 施設の準備 ⇒ 初期投資の軽減、遊休建物や施設の再利用、公設の信頼性をビジネスに利用
④実践的な人材育成の重要性 ・起業実務教育講座の実施 ⇒ 実践的な教育の効果と人材育成（支援体制の重要性）
⑤ICT で弱者同士を連携（それぞれの強い所を活かす）したビジネスモデルの展開 ・農家と ICT 業界が連携して、規格外野菜のマッチング・システム。 ・小規模な観光農園、レストランなどと観光会社との連携システム。
(2) 失敗した事例・要因 ・システムありきで構築し、運用している場合。

3, ICTの導入・全国展開に当たっての課題

(1) 制度的な問題点

・異なった組織やグループを連携するシステムでは、システムの利用者（需要者）はできる限り安い使用料を望んでいるが、一方のシステムを提供している側（供給者）は、できるかぎり高い使用料が欲しい。いわば当然のこととして利害が対立した場合の手数料の問題が残されている。この問題への対処方法のアイデアや事例紹介、情報提供の必要性。

・システムの標準化と、一方では地域特性を活かすためのバランス感覚が難しい。地域特性を活かせるシステムが重要。これを支援する体制をいかにして作るか。

・地域のインフラが整っていない。

・閉鎖的な地域が多い。

(2) 技術的な問題点

・利用端末がパソコンから携帯に移っており、それに伴って情報発信量の制約が強くなる中でコンテンツの対応が必要である。

(3) 人的な問題点

・システムの利用者と開発者との間で、理解の食い違いがあり、使い勝手の悪いシステムが目立つ。コンテンツの制作や編成にも時間がかかる。

・運営、資金管理、マネージメントなど広範囲の専門知識が必要であるが、その人材を確保するのが難しい。

・役所のICT教育ができていないところが多い。関心をもつのは、ごく一部の担当者のみである。

4, 課題解決に向けた提言

(1) 地域情報化アドバイザーの重要な役割

地域が抱えている問題や課題を理解した人と、システム開発の担当者との連携を図るには、経験豊かな人の介在が必要である。また、役所のICTリテラシーの向上も必要である。このような現実的に直面している深刻な実態から、地域情報化アドバイザーの役割の重要が改めて認識できる。

(2) 地域住民や地域の個性を重視した地域情報化政策

情報の利用者側に立ったシステムの構築と運用が必要である。特に、地域の人々は企業の構

成員（働き盛りの年齢層）と違って、退職者、子ども、主婦、お年寄りや体の不自由な方々がおられるので、地域情報化は企業の情報化と違って、利用者の視点が重要であり、国としても重要な取り組みである。

（3）魅力的な地域情報化の進め方や考え方の整理（地域の方々が理解しやすいシナリオ作成）

地域情報化の方向性として、次の3つの展開軸が考えられると思う。①地域産業の振興を支援するための ICT 施策。②地域住民の生活の安全・安心を確保・支援（条件不利地域の自然災害や緊急医療対策など）するための ICT 施策。③地域の個性を活かして、精神的に豊かなライフスタイルの創造を支援するための ICT 施策。日本の各地域で様々な生き方があり、また考え方がるので、それらのライフスタイルを気軽に参照でき、交流できる場の創造や生涯学習（ICT時代の井戸端会議・寺小屋のようなもの）。

上記の①は経済的な収益活動であり、ICT の効果は数値的に評価が可能であり、一般的に実践されている展開軸である。これは企業との競争や連携が前提になる。

次の②は、地域住民にとっては重要な分野であるが（特に条件不利地域では重要）、ICT 施策の効果为数値的に把握することは困難である。この分野は公的な組織が関与しないと ICT 化は進み難い分野である。

最後の③は重要な分野であるが、ICT 施策の効果が数値的には把握することが最も困難な分野である。ICT 施策の効果と費用負担などについて住民の合意形成が必要である。そのための情報提供が基本となる。

地域情報化は ICT の波及効果が大きいので（外部効果が大きい）、営利的な観点のみでなく、それ以外の評価をいかにして取り組むのか、また地域住民の合意形成をどのようにして行うのかといった観点からの整理が必要であると考えられる。